

一人で探検、みんなで探検

清水達之

バブア・ニューギニアの洞窟探検に、数十人という世界中の洞窟探検家達が集まり、一つの隊を形成していた。私が、1982年の洞窟偵察で出会った探検隊である。また、植村直己氏は、北極を犬ぞりで踏査した。1976～78年のことである。

両者とも、近年行われた代表的な探検であるが、前者は、組織による探検（組織探検）の、後者は、個人による探検（個人探検）の、代表的なものであろう。

一つの目的に、複数の探検家が集まり、組織を作る。当然、その隊員一人一人が、自分自身の探検を持っているわけだが、その探検が一人では無理な場合、自分と同じ目的を持った組織の一員となる。つまり、一人では無理な探検を、大人数で行うことによって可能にするわけである。そして一つのことをいろいろな角度から見ることができ、より正確な調査ができるようになる。しかし、その反面、複数になるということで、各個人が、自分の探検というものを、少しづつ譲らなければならない部分も生じてくるだろう。

ところが、個人探検では、隊員の探検がそのまま隊の探検であり、自分の思うがままの探検が行える。つまり、個人の個性をフルに生かした探検ができるわけだ。しかし、一人でやるということに、探検的価値を見出しているものが多く、複数になると、その人のやっている探検の価値は低くなり得る、とも言えるだろう。また、技術や知識も高度なものが必要だし、その人への負担も大きくなる。

では、学生の個人探検はどうだろうか。学生探検家といえば、探検を始めて数年の初歩的探検家でしかなく、技術、知識が未熟な場合が多い。それを押しやろうとすると、小規模、魅力薄になる恐れがある。

となると、学生には組織探検のほうが適しているのだろうか。確かに、多くの人間がいるということで、個人の未熟なところは、カバーできるし、個人の負担も軽くなるだろう。現に多くの学生は隊を組んで探検を行っており、我が部でも過去において一人で行われた探検は、ほとんどない。

しかし、そこには問題はある。各隊員が、本当に自分の探検を持って参加しているか、ということだ。本来なら当然そうでなければいけないのだが、現在の探検部を見ていると、ふとそういう疑問を抱いてしまう。もちろん、自分の探検というものをしっかりとつかみ、魅力ある計画を出している人もいる。しかし、ただ人に誘われるままに隊にはいり、なんとなく続ける人が、少なからず居るのではないだろうか。自分の探検を持たない人が隊に参加しても、なんら隊にはプラスにならないだろう。すべての新入部員が、自分の探検を持っているとは考えられないし、それでいて、いずれかの隊に参加せざるを得ないのが現状である。一日も早く、自分の探検を見出してほしいものだ。探検部とは、探検に憧れるだけの人間の集団ではなく、自分の探検を持ち、それを達成する努力をする人間の集まりなのだから。

(26代)